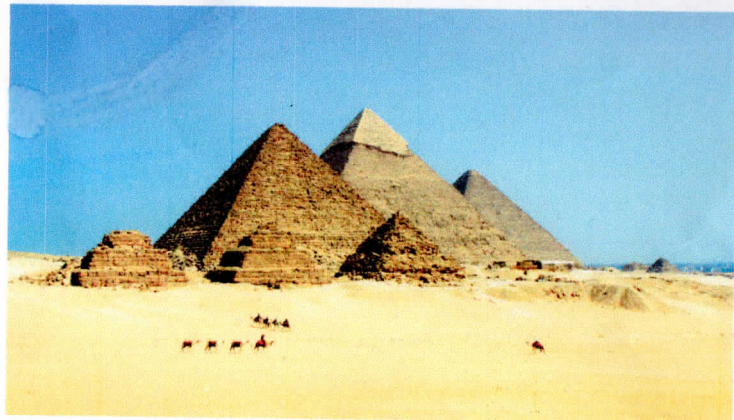


世界遺産 ピラミッドが建設された背景と謎



ギザの3大ピラミッド〜右からクフ王、カフラー王、メンカウラー王
(出展: David McEachan (Pexels))

エジプトの巨大なピラミッドの中へ入ってみようと思ったのは、今から60年前初めてそのピラミッドの実物の前に立った時である。目の前のピラミッドの迫力に圧倒され、もっと知りたいと思った。紀元前の古王国時代に建造されて以来、実に4800年が経つ。近寄ってこの世界遺産の石壁に触れてみる。積み重なった花崗岩に重い手触りを感じた。得も言われぬ周囲からの圧倒されるようなパワーには言葉もない。日本では何とか土器が見つかった縄文時代中期の昔に、広大な灼熱の砂漠によくぞこのような今日に残る巨大な建造物を建てたものだと、古代エジプト人の高邁な構想力と技術には頭が下がる。

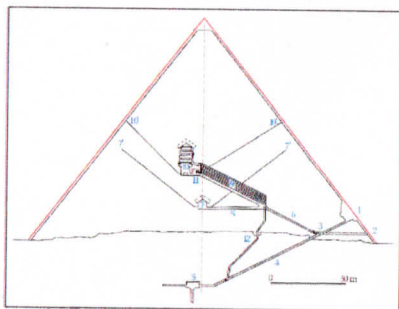
しかし、見惚れてばかりもいられない。すぐに疑問が生じてきた。はて? 一体

誰が、何のために無限の時間と労働力を注ぎ込んで、かくも巨大なピラミッドを建てたのだろうか?

目の前で見ているだけでは、この偉大な建造物は分からない。できるだけ全体



近藤節夫
(1938年生まれ・東京都)
エッセイスト



クフ王のピラミッド内部断面図

出展: Wikimedia Commons (バブリックドメイン)

1. 入口 2. 盗掘孔 3. 上昇通路入り口
4. 下降通路 5. 未完の地下室 6. 上昇通路
7. 女王の間 8. 水平通路 9. 大回廊
10. 王の間 11. 控えの間 12. 脱出孔

像を、身体全体で知ることである。ちょうどその時、外国人の観光グループがクフ王のピラミッド内へ入るのを見て、不意に自分も中へ入ってみたくなった。彼らの後について行った。一歩中に入ると薄暗い明かりはあるが、少々暗い。はっきりとは記憶にないが、石に触れながら大回廊を歩き、鉄パイプでできた梯子伝いに一歩一歩登った。その時、これまで経験したことのない岩石に押しつぶされるようなプレッシャーを身体に感じた。途中休みながらもようやくゴール「王の間」に辿り着いた。かなり大きな空間には頑丈そうな石棺が置かれていた。発見された当時、ここには王のミイラが安置されていたという。暗く窮屈なトンネルを抜けて再び外へ出た時、不思議なほど太陽がまぶしく、愛おしいものに感じられた。



大回廊のイラスト

そして外へ出てからしばらくして、再び疑問が蘇ってきた。このピラミッドは一体何の目的で誰のために建設されたのだろうか？

1、3つの巨大なピラミッド

ピラミッドは、古代エジプトの国王（ファラオ）の死後、永遠の命を得るためのお墓として建てられたという説が定説となっている。王の遺体は発見当初ミイラ化され、当時はピラミッドの中に宝物や生活用品とともに埋葬されていた。

カイロ市郊外の砂漠ギザには代表的な巨大ピラミッドが3つ並んで見られる。最も古く大きいのはクフ王（ファラオ）



「王の間」に置かれた石棺
出展：Wikimedia Commons
(パブリックドメイン)

2. いつ誰によって建設されたのか？

約5千年も昔にこれほどの大建築物を建設することができたのは、クフ王らが強大な権力を有し、資金的にも充分賄える豊富な資産を蓄えていたからである。古代エジプト王は権威と血筋を重視、堅持する絶対的支配者であり、同時に国民

の名を冠したもので、建設当初は高さが147mあった。しかし、今では頂上のキャップストーンと呼ばれる化粧石が失われて138.5mになった。それでも3つの中では一番大きい。次いで息子のカフラー王のもので高さは136mである。見た目はクフ王のものより大きく見えるが、これはやや高い台座の上に建設されたせいで、実際は父のクフ王より小さい。3つ目は、孫のメンカウラー王のために建設され、他の2つに比べると大分小さく高さは65mである。それぞれに建設したファラオの名が冠せられている。

にとっては神々の一柱であるという宗教的信仰心があったものと考えられている。3人の国王は、彼らの生存中に自らの権力によって工事を監督、差配し、建設工事に関わった。

そのために、まず国王自らが、己の権威と実績を後世に伝えられるお墓としてピラミッド建設の大工事を遂行することを宣した。国民が敬うべきピラミッドの建設に当たり、有能なプロジェクト・リーダーを任じ、緊密なチームワークの下にいくつかのチームに分れ、大勢の優れた技術者、建築士、労働者を統率し一致協力してともに働いた。建設機械やブルドーザーのない時代にこれだけの大仕事をやり遂げたのは、大勢の労働者が余程効率良く働いたからだと考えられる。

3大ピラミッドは父子孫の3代に亘るそれぞれ個々の墓地である。意外にもクフ王の建設から3代目のメンカウラー王まで、それぞれあまり建設時期が離れていない。紀元前2550年ごろから紀元

前2490年頃までの僅か60年間にすべて造られたと言われている。これほどの巨大な建造物をそれほど長い時間を掛けず、3つも立て続けに完成させた大プロジェクトだった。正に驚異的な建築技術であり驚きである。

紀元前5世紀の古代ギリシャの歴史家ヘロドトスが「クフ王のピラミッドは、10万人の奴隷が20年間働いて造った」と公にして以来、それが一種の通説として伝えられた。

しかし、後年の研究により分かったことであるが、建設にかかった時間はその通りであるが、建設に関わったのは奴隷ではなく、当時のエリート建設労働者だった。5千年前のナイル川周辺には約100万人もの人々が暮らしており、彼らが人を介してこの大建設工事に携わる労働者として駆り出されたと考えられている。国王は国民を強制的に徴用するのではなく、作業員に対して高い賃金を支払い好待遇で処遇し、更に福利厚生面が充実していたことが推察できる。ピラ



クフ王のピラミッドを背に (左：近藤)

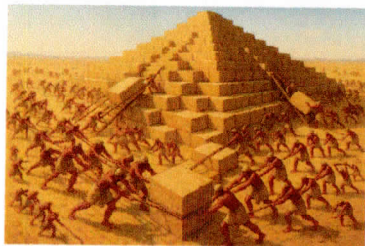
ミッド建設の現場近くに作業員たちが寝泊まりできる小屋も用意された。食事にパンやタマネギ、ニンニクなどの野菜、その他にビール、牛肉までも用意されたことが発掘調査によって明らかにされた。労働者のための専用の墓地まで発見されている。考古学者たちは「ピラミッドの建設は非常に危険な作業であり、建設に携わった人々はその功績を讃えられ、名誉ある場所に埋葬された」と推測している。一連の証拠から「ピラミッド建設に携わる労働者はある種のエリートであり、王族のような食事を与えられていた」。こうした労働者の献身的な努力と協力に

よって、3つの国王の墓地が造られ、今日われわれが目にすることができるとして残されたのである。

3. どうやってピラミッドを建設したのか？

ギザの大ピラミッドで最も謎に包まれているのが、その建設方法である。クフ王のピラミッドには、重量2.5トンから15トン、最大で60トンの石材、約230万個が使用されたと推定されている。資材は、アスワンの採石場で切り出された花崗岩、シナイ半島の銅製工具、レバノンの木材などがナイル川を伝って運ばれた。地元エジプトのみならず、広く近隣国の素材も使われたのである。

建設には、ある程度の高さまでなら大人数が力を合わせて、石を並べたり上げたりすることは可能であるが、クレーンもない時代に、当時147mの高さまでしかも徐々に狭くなる場所に、どうやって重い石材を運んだのだろうか？ ソリ、



ロープ、トロツコ、梃子などを使い、運び上げたというのが一般的な定説になっている。石を上方へ運ぶ際の難しい点は、そ

の傾斜路には傾きがあり、それが急であるほど困難であることである。ところが、上部箇所には大きな穴がいくつか開いており、その穴に柱を建ててロープをかけ、石材を引き上げたと推察できる。一種の綱引きと滑車の要領である。



運び込む高さまで傾斜路を作って人の力で押したり、引っ張り上げたりした。しかし、頂上ま

で運ぶには、かなり急な斜面になり、特に上に行くに従い角度は鋭くなり、引っ張り上げるのが難しくなる。緩やかな傾斜にすれば長い距離が必要だった。いずれの方法にせよ、正確な測量に基づく精巧な設計と頑丈な造りは、チームと労働者たちの知恵と工夫によるものである。

ピラミッドのような巨大な建造物の建設に従事する際には、その対象が特定の個人でも王でも、人を動かす宗教的な強い信仰心が求められた。古代エジプトの民が自らの意志で巨大な建造物である王墓の建造に積極的に携わっていたと考えられている。

こうして3つの巨大な古代ピラミッドは、3人の王をはじめ、労働者を主とする従順な建設関係者らの知恵と努力の結果として完成した。しかし、率直に言ってピラミッドは、今もって首を傾げることが多く謎だらけである。ピラミッドには謎が尽きない。